

修士論文（要旨）
2026 年 7 月

日本語多義動詞の意味分析
—シルとワカルを中心に—

指導 茶谷 恭代 准教授

国際学術研究科
国際学術専攻
言語教育実践研究学位プログラム
224J1008
楊 子軒

Master's Thesis (Abstract)
July 2026

A Semantic Analysis of Japanese Polysemous Verbs:
A Focus on *Shiru* and *Wakaru*

Yang Zixuan
224J1008

Master of Arts program in Linguistics and Language Education
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Yasuyo Chatani

目次

1. 研究背景と研究目的.....	1
2. 先行研究.....	2
2.1 辞書における語義の記述.....	2
2.2 先行研究の整理.....	5
3. 研究方法.....	11
3.1 分析の理論的枠組み.....	11
3.1.1 多義動詞の意味構造.....	11
3.1.2 構文パターンの捉え方.....	12
3.2 調査の概要.....	12
3.2.1 調査データ.....	12
3.2.2 分析対象の限定.....	12
3.3 分析手順.....	13
4. シルとワカルの意味記述.....	14
4.1 シルとワカルの相違.....	14
4.1.1 形態の違い.....	14
4.1.2 認識対象の表示.....	14
4.2 シルとワカルの語義分析.....	20
4.2.1 語義判定の前提.....	20
4.2.2 シルの語義分析.....	20
4.2.3 ワカルの語義分析.....	24
4.3 形態的・周辺の用法におけるシルとワカルの相違.....	29
4.3.1 希望表現における相違.....	29
4.3.2 可能表現・変化表現における相違.....	30
4.3.3 シラレルの位置づけ.....	31
4.3.4 シラセルの位置づけ.....	32
4.3.5 ワカルにおける使役形と受身形.....	33
4.3.6 受身形・使役形から見たシルとワカルの相違.....	34
4.3.7 理解容易性を表す「やすい・にくい」.....	34
5. シルとワカルの置き換え可能性と中国語訳への示唆.....	35
5.1 置き換え可能性による語義対応の判定基準.....	35
5.1.1 認識対象の性質.....	36
5.1.2 認識対象の表示形式.....	36
5.1.3 動詞の形態.....	36
5.1.4 共起要素.....	36
5.1.5 文脈上の語用機能.....	37
5.2 語義別に見た置き換え可能性.....	37
5.2.1 シルの置き換え可能性.....	37
5.2.2 ワカルの置き換え可能性.....	41

5.2.3 置き換え可能性のまとめと中国語訳への示唆.....	46
6. 今後の課題.....	49
参考文献.....	51

日本語の基本動詞であるシルとワカルは、認識に関わる類義語であり、中国語ではしばしば「知道」「明白」など近い訳語で処理される。しかし、両動詞は常に置き換えられるわけではなく、認識対象の性質、格形式、動詞形態、共起要素、前後文脈によって意味焦点が変化する。本研究は、シルとワカルの意味を実例に基づいて記述し、語義ごとの対応関係と置き換え可能性を明らかにすることを目的とする。

調査資料として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を用い、語彙素読み「シル」「ワカル」によって抽出した各200例を分析対象とした。分析では、動詞の形態、認識対象の表示形式、共起要素、前後文脈を確認し、それぞれの用例がどの語義に属するかを判定した。

その結果、シルの語義は、「情報・知識を取得・保持する」、「理解・熟知する」、「経験・体験する」、「面識・認知する」、「責任を回避する」に整理した。一方、ワカルの語義は、「判明する」、「理解する」、「同定・識別する」、「会得する」、「応答・承諾する」に整理した。

さらに、本研究では、語義間の置き換え可能性を整理した。ただし、置き換え可能性は、単に文法的に入れ替えられるかどうかではなく、置き換え後に原文の語義が保持されるかどうかを基準として判断した。

分析の結果、シルの語義1「情報・知識を取得・保持する」の下位分類1a「情報獲得」とワカルの語義1「判明する」の下位分類1a「事実・結果の判明」は対応しやすく、シルの語義2「理解・熟知する」とワカルの語義2「理解する」は、肯定形で理解状態を表す場合には対応しやすいことが分かった。シルの語義3「経験・体験する」は経験を通じた理解が中心である場合はワカルの語義2a「意味の理解」に対応することが可能だが、経験そのものが中心である場合は対応しない。シルの語義4「面識・認知する」はワカルに対応する語義がない。また、シルの語義5「責任を回避する」は、シルの独特の語義としてワカルに対応しない。

ワカルからシルへの置き換えにおいても、語義によって対応の程度が異なる。ワカルの語義1a「事実・結果の判明」はシルの語義1a「情報獲得」に対応する、ワカル語義1b「未確定事態の不明・判断保留」は、「知らない」ではなく「知れない」「知ることができない」などの可能否定形式によって近い内容を表して対応する。ワカルの語義3「同定・判別する」は、シルに置き換えると既知状態や情報獲得の意味に移りやすく、対応しない。ワカル語義4「会得する」は、「機微を知る」のようなシルの語義2「理解・熟知する」とは対応する。

以上の分析から、シルとワカルは類義関係にありながら、語義、構文、形態、語用機能によって対応関係が制限されることが明らかになった。また、この結果は中国語訳にも示唆を与える。すなわち、シルを一律に「知道」、ワカルを一律に「明白」と対応させるのではなく、情報獲得、内容理解、経験、同定、会得、応答といった語義ごとに訳語を選択する必要がある。ただし、本研究では中国語訳の体系的分類や教材化までは行わず、今後の課題として位置づける。

参考文献

日本語文献

- 葦原恭子（2010）「日常会話における「わかる」と「知る」の使い分け——談話の分析を通して——」『琉球大学留学生センター紀要』7，17-32
- 奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8（奥田靖雄1985『ことばの研究・序説』に再録，3-20）
- 高橋圭介（2003）「類義語「しる」と「わかる」の意味分析」『日本語教育』119，31-40。
- 生天目知美ほか（2017）「多義動詞としての「知る」と「分かる」の使い分け——コーパスを活用した類義語分析——」『国立国語研究所論集』12，63-79
- 早津恵美子（2016）『現代日本語の使役文』ひつじ書房
- 牧野美智子（1996）「現代日本語「シル」と「ワカル」の類義関係について——文脈において二動詞がとる対象からの分析——」『湘南文学』30，157-168
- 牧野美智子（1998）「「知ル」の〈体験性〉にみる意味の焦点化の構造」『湘南文学』32，95-107

辞書・辞典類

- 小泉保ほか（編）（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 国立国語研究所（編）『基本動詞ハンドブック』
<https://www2.ninjal.ac.jp/verbhandbook/>（2026年6月10日閲覧）
- 田忠魁ほか（編）（1998）『類義語使い分け辞典：日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』研究社
- 西尾実ほか（編）（2019）『岩波国語辞典 第8版』岩波書店
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

教科書

- 唐磊ほか（編）（2014）『新版中日交流標準日本語 初級上 第二版』人民教育出版社。